

解題と考察



(第17景) 片浦より



『(加世田) 再撰帳』「片浦港」より

渡辺 美季

I 『薩藩勝景百図』による南九州生活絵引

1. 『日本近世生活絵引』南九州編とは

『日本近世生活絵引』の第三期（2015-2016年度）共同研究では、第二期（2011-2013年度）共同研究の成果である奄美・沖縄編を発展的に継承すべく、薩摩を中心とした南九州地域の生活絵引の編纂に取り組むことにした。

南九州地域の生活文化を描くものとしては、『三国名勝図会』に代表される公的地誌類の挿絵や、『^{しずのおだまき}倭文麻環』・『鹿児島ぶり』といった書籍の挿絵がよく知られている。しかし「近世の庶民生活そのものを主題とした絵画」は意外なほどに見当たらない。そもそも作成されなかったのか、作成されたものの失われてしまったのか、それすらもわからないが、「異国的な珍しい」風俗文化が絵画化され土産物などの形で消費されていた奄美・沖縄の場合と比較すると [渡辺美季 2014]、南九州についてはそうした需要や商品化の回路が希薄であった可能性が高いように思われる。

いずれにせよ「庶民生活そのものを主題とした絵画」が見当たらない以上、それが南九州地域に関わる絵画文化であると受け止めるしかない。そこで現存する絵画——それらはそれらで極めて興味深い内容である——を慎重に検討した結果、その希少性や完成度などから東京大学史料編纂所蔵『薩藩勝景百図』（以下、百図と略記）⁽¹⁾を絵引編纂の素材として取り上げることにした。百図は薩摩（鹿児島）藩が編纂した地誌の内、唯一の彩色画である。これまで詳細に検討されたことがなく、第三期共同研究で扱う意義は大きいと判断した。ただしあくまでも名所を主題とした絵画であるため、「人々の日常生活を

像資料から引き出して、特定の過去を知る手がかりとする」[福田 2007] という生活絵引の編纂目的に適合するよう、①百図から近世の生活文化をより見出し得るような場面（景）を絞り込み、②他の書物の関連する挿絵をも併せて分析することにした。

結果的に、全 102 景の百図から 29 景を選定して絵引を編纂し、併せて『薩藩名勝志』・『三国名勝図会』・『(加世田) 再撰帳』・『薩摩風土記』・『鹿児島ぶり』から百図を相補うような図像を選び、『(天保年間) 鹿児島城下絵図』と共に参考絵図として収録した。

2. 薩摩藩の地誌編纂と『薩藩勝景百図』

百図は、薩摩藩が編纂した地誌の一つである。近世日本の公的地誌の編纂は、中国の地方志（「方志」⁽²⁾）の日本への導入を意図した幕府によって開始され、それと連動して各藩でも地誌が編纂されるようになった [鹿児島大学附属図書館編 1997・2000、白井 2004、高津 2010]。こうした流れの中で、薩摩藩でも地誌の編纂が開始される。それは 18 世紀末頃、第 8 代藩主（島津家第 25 代当主）であり「蘭癖大名」として名高い島津重豪⁽³⁾の時代（在位 1755-87 年、隠居後も藩政に関与した）のことであった。

薩摩藩の地誌は、当時民間で流行していた「名所図会」⁽⁴⁾の形式で編まれたところに大きな特徴を持つ [鹿児島大学附属図書館編 2000、高津 2010]。名所図会とは古来詩歌に詠われたような名所旧跡を詩歌と共に案内する書物で、1780（安永 9）年の『都名所図会』⁽⁴⁾を嚆矢とする。この書は、俯瞰図・風俗図

を中心とした極めて精密な挿絵を豊富に掲載するという点で、従来の案内書とは大きく異なる画期的な書物であり、以後同様の形式を持つ名所図会が市井にて盛んに編纂・刊行された〔藤川 2014〕。

この全国的な名所図会ブームを背景に、薩摩藩は1806（文化3）年に最初の官撰地誌である『薩藩名勝志』を完成させる⁽⁵⁾。それは藩内記録所の指揮により18世紀末頃から19世紀初め頃にかけて各郷で作成された山川・社寺・名所旧跡などの調査報告を、記録奉行の藩内巡歴の成果と併せて整理・統合した上で、詩歌（和歌・漢詩）および約480点の挿絵を加え名所図会の形式でまとめられた〔鹿児島大学附属図書館編1997・2000〕。挿絵の作者は不明である。

さらに1815（文化12）年、島津重豪の命により記録所にて『薩藩勝景百図』とその解説書『薩藩勝景百図考』（以下、百図考と略記）が作成され、將軍徳川家斉に献上された。藩政史料を集成した『（薩藩）旧記雑録追録』巻150には次のようである。

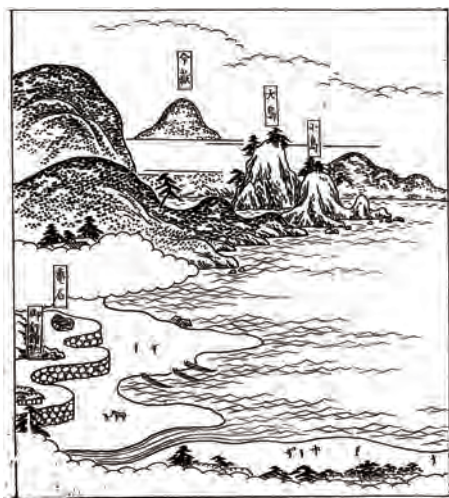
我が領内には古い邦ゆえに名山奇景が多くある。このため大史（記録奉行）の橋口兼古^{かねふる}に命じ、勝景百図を選んで、絵師に描かせて五巻とし、「薩藩勝景百図」と名付け、また和語で図考五冊を編集させてこれに添え、この（文化

12=1815年の）春二月に重豪が私的に將軍に献上した⁽⁶⁾。

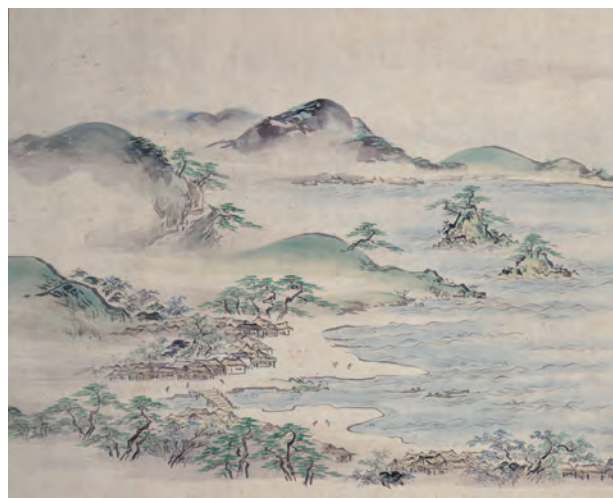
現存する百図・百図考は、將軍に献上されたものの副本と見られ、東京大学史料編纂所にて国宝・島津家文書の一部として所蔵されている⁽⁷⁾。百図は5巻5軸の卷子本で、1-3巻が「海辺」編、4-5巻が「陸路」編である⁽⁸⁾。計102景の彩色画からなり、各景に画題が添えられている⁽⁹⁾。

百図・百図考共に『薩藩名勝志』を大きく参照して編まれたものと考えられるが、文章（百図考）は大幅に簡略化され、絵画（百図）にも様々な異同がある。例えば百図には、『薩藩名勝志』と構図が同様だが細部は異なる景が散見され、また『薩藩名勝志』には存在しない屋久島・種子島の景も含まれている〔鹿児島大学附属図書館2000〕。また絵画としては百図の方が全体的に細かく描き込まれている【図1-①・②参照】。ただしそれは必ずしも「より正確に」描かれているわけではない⁽¹⁰⁾。將軍に献上するという目的上、正確さよりも絵画的な見栄えが強く意識・追求されたのであろう。

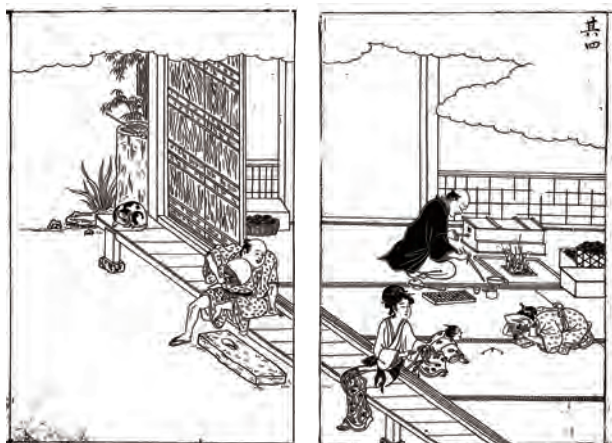
なお百図の方が「描き込まれている」とはいえ、人々の日常生活に関わる要素については、百図では割愛ないしは簡略化されることが多い【図2-①・②参照】。百図編纂の姿勢として、こうした生活文化的な情報は相対的に重視されていなかった可能性



【図1-①】『薩藩名勝志』の秋目浦
（鹿児島大学附属図書館蔵）



【図1-②】『薩藩勝景百図』の秋目浦



【図 2-①】『薩藩名勝志』の金山其四
(鹿児島大学附属図書館蔵)

が指摘できよう。また『薩藩名勝志』に見られる神社祭礼（神楽や流鏝馬）や名所由来の物品（古鏡や琵琶など）の挿絵も、「勝景」集成という性格ゆえか、百図では取り上げられていない。ただし苗代川の帰化朝鮮人による演奏・舞踊の絵図のみは例外的に百図にも残されており、薩摩藩が将軍に「ぜひ見せたい」要素であったことがうかがえる。

百図は藩の御用絵師が作成したとみられる。近世初期以降の幕府による狩野派庇護の影響を受け、薩摩の御用絵師も狩野派が主流となっていった[永田・山西 1998]。とりわけ御用絵師として名を挙げた木村探元（1679-1767年）の出現により、薩摩の狩野派画壇は最盛期を迎えた。百図も狩野派の作風で描かれており、集落の家屋群や山・草木、人物の服装や表情などに狩野派によるステレオタイプの絵画表現が用いられている。従ってこうした部分に関しては、写実性は低く、当地の生活文化をリアルに反映しているとは言い難い側面があるだろう。

1824（文政7）年、薩摩藩は各郷に命じて、天明・寛政年間の報告書の修正増補版（「再撰帳」）を記録所に提出させ、これを用いて1843（天保14）年に『薩藩名勝志』を増補改訂した『三国名勝図会』を完成させた（三国とは薩摩・大隅・日向を指す）。薩摩藩の「名所図会」形式の官撰地誌の集大成である。その挿絵は『薩藩名勝志』とほぼ同じだが微修正があり、『薩藩名勝志』には存在せず、百



【図 2-②】『薩藩勝景百図』の金山其二

図では作成された屋久島・種子島の挿絵が収録されている点などには百図の影響が確認できる。

3. 薩摩の異国性と「薩藩勝景百図」

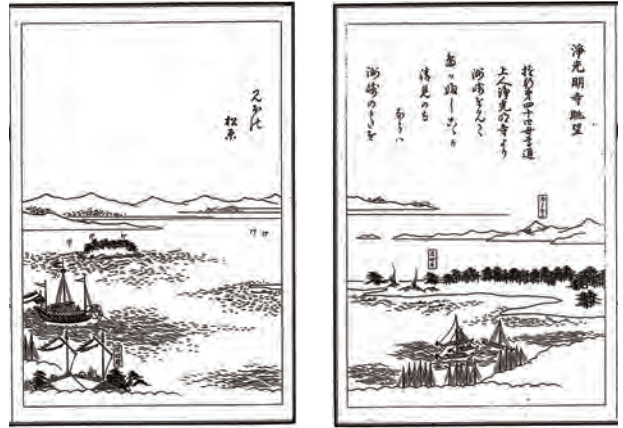
百図の大きな特徴が、琉球館・琉球船・朝鮮人集落といった異国的要素（以下、これを異国性と記す）である。百図は薩摩藩が将軍に献上する目的で作成したため、その内容には藩の自意識が強く反映されていると考えられる。すなわち藩が将軍（ひいては藩外の人々）に「見せたい」ものが描かれる一方、「見せたくない」ものは極力排除され、また藩外から「見たい」と期待される要素も意識して作成された可能性が高い。そうした観点から見る時、百図の異国性は、藩の自意識を支える重要な要素であったと見なすことができるだろう。

九州の南端に位置する薩摩には、古来より大陸との盛んな交流があり、百図12景「唐湊」（坊津）はその代表的な旧跡といえる。これについて百図考は「むかしは遣唐使も此^{この}ところより開帆し、唐土諸蕃の客船もここに輻輳^{ふくそう}し、本邦三津の一なるを以て唐湊といへり」と解説している（巻1）。しかし過去のことであるためか、こうした大陸（主に中国）との関わりについては絵図（百図）では表現されていない。

百図で視覚的に表現される異国性は琉球と朝鮮に関わるもので、具体的には、①琉球館（1景「鹿児

島」・2景「鹿児島其二」）・琉球船（同前および7景「山川湊」）、②苗代川の朝鮮人陶工（68景「苗代川」・69景「苗代川其二」）である。

琉球については、わざわざ琉球船が停泊している状態を描いていることから、異国（琉球）を支配する唯一の藩としての自意識が反映されている可能性がある。ただし百図考における「鹿児島」の解説文には琉球館・琉球船に関わる記述は見当たらず（これは『薩藩名勝志』も同様である⁽¹²⁾）、「山川湊」の解説文も「自他泊舟の津口なり」と記すのみである（共に巻1）。すなわち『薩藩名勝志』から百図・百図考までの官撰地誌では、城下の琉球館も山川港の琉球船も「名勝」としての項目立てや説明はなされていない。しかし『三国名勝図会』では「琉球館」の項目が設けられ（巻2・鹿児島之一）、「府城の東北。坂本村新橋の北口にあり、本藩の兼領琉球国述職の第館なり。其国の官人、王に代り交番述職して絶ることなし。門内に双旗を樹つ。其製奇にして風^{ヘンホン}に翩翩すれば、毒獣の飛動するが如く。人物の状貌衣冠等皆異にして、これに過るもの^{マサ}正に殊域に遊ぶに等し」と述べ、1609（慶長14）年の島津軍による琉球出兵にこそ触れないものの、自らの琉球支配を明記し琉球の異国性を強調している。また「山川港」の項目内にも「琉球諸島に往来する者皆風候を待つ^{ヒト}の所とせり」と記されている（巻22）。こうしたことから琉球館の名勝化が進み、山川港に関しても琉球の要素が明記されたことがわかる。百図はその過渡地点であったと位置付けることができるであろう。なお『三国名勝図会』の琉球館の項目に対応する挿絵はないが、後巻の浄光明寺の挿絵左下に琉球館の屋根の部分と琉球船が小さく描かれている（巻6・鹿児島之五）【図3】。この挿絵とほぼ同じものが『薩藩名勝志』にも載る。また『（天保年間）鹿児島城下絵図』（鹿児島市立美術館蔵、参考絵図（6））にも琉球館付近に停泊する琉球船が描かれている。こうしたことから城下の琉球館と琉球船をセットにした描き方が藩内で定番化していたものと考えられる。



【図3】『三国名勝図会』の琉球館・琉球船

（国立国会図書館デジタルコレクションより）

朝鮮については、『薩藩名勝志』の「苗代川」の項目（巻5）に百図と同構図の挿絵を添えた詳細な解説文があり、『薩藩名勝志』においてすでに名勝化していた苗代川の朝鮮人集落を、百図が踏襲したことがわかる。ただし『薩藩名勝志』が苗代川の住民について「嫁娶婚媾を互ひにして倭姓に^{えら}択ぶことを禁す」（巻5）として、藩から日本風俗が禁じられていたことをうかがわせる記述であるのに対し、百図考では「素より国語に習ふといへども猶韓音を伝え、容姿服制の如きも亦旧俗を存し、^{ヤキモノ}瓷窯を業とし生活をなす」と説明され（巻4）、藩の関与は明示されていない。

『薩藩名勝志』が記すように、苗代川における朝鮮風俗の保持は薩摩藩の指示によるものであった⁽¹³⁾。藩は苗代川の朝鮮人被虜に対して同化ではなく異化政策をとったのである。しかしこれは近世の日本においては全くの例外的なケースであった。いわゆる「鎖国」政策の展開に伴い、幕府は日本に居留していた「外国人」に帰国か日本同化の⁽¹⁴⁾択一を⁽¹⁴⁾迫り、帰国を選ばなかった／選ばなかった外国人（各地の朝鮮人被虜も含む）は、「家」を単位に国家に把握される「日本人」となり、外見や習慣も日本人に同化していったのである〔荒野1987、倉地2001、松井2010〕。

こうした状況において薩摩藩が苗代川住民に対し敢えて異化政策を採った理由は、琉球支配の事実

加え、苗代川朝鮮人の異国性を顕示・強調することで、両異国の人々を従える藩としての権威を高め、このイメージを対外的・藩内的に利用するためであったと推測されている [渡辺芳郎 2005]。加えて百図考が「先世征韓の役にありし時……大に戦ひ敵軍を撃殺し……凱旋の日その帰降の朝鮮人二十二姓男女数十人を率ひ来れり」と記すように (巻4)、島津氏の武威を支える「過去」の保存・活用という側面もあったであろう。実際、苗代川住民は普段は日本語・和服を用い、朝鮮服着用も年賀登城および藩主や藩の重役が苗代川を通過する時だけであった⁽¹⁵⁾。すなわち彼らの異化は藩によるある種のイメージ戦略であり、百図考の記述姿勢から勘案するに、この「からくり」——舞台裏——は対外的に「(あまり)見せたくない」要素だったのではないだろうか。なおこうした百図考の記述姿勢は『三国名勝図会』(巻8)へも継承されている。

百図を含む官撰地誌の中で名勝化された琉球・朝鮮の異国性は、実際に藩の外から強く期待・需要されていた。近世期に薩摩藩を訪れた人々の紀行文——例えば①橋南谿『西遊記』(1782-83年、訪薩)、②古川古松軒『西遊雜記』(1783年、訪薩)、③佐藤成裕『中陵漫録』(1781-83年、訪薩)、④高山彦九郎『筑紫日記』(1792年、訪薩)、⑤肥後某藩士『薩遊紀行』(1801年、訪薩)、⑥高木善助『薩陽往返記事』(1828-39年、6度訪薩)、⑦伊東陵舎(凌舎)『鹿児島ぶり』(1835-36年、訪薩)、⑧松浦武四郎『西海雜志』(1837年、訪⁽¹⁶⁾薩)——を見ると、「琉球館を一見せしに、門番有りて内に入ることを禁ぜり」(紀行文②)とあるように一般人の立ち入りが禁じられていた琉球館に「入った」という記事は見えないが、全員が城下で琉球人と接

触・交流し(姿を見かけただけの者から共に会談・飲食する者まで様々である)、苗代川にも立ち寄って(あるいはわざわざ赴いて)いる。「苗代川の朝鮮人」と「城下の琉球人」というエキゾチックな名勝見物は薩摩訪問の定番だったのであろう。さらに「長崎にて唐人にまじはるとは違ひて、薩州にて琉球人御領分の者の事なれば、いか程往来して親しく交りても誰はゞかる事もなく、帰京の後も直に彼国へ文通せし事なり」(紀行文①)とあるように、藩内、すなわち島津氏の支配領域に属する琉球人(と朝鮮人)は、近世の日本人にとって最も「敷居の低い」異国人であったことも、その名勝化に拍車を掛けたものと思われる。

薩摩の異国性に対する希求は、人のみならず情報や物にも及んだ。1801年に薩摩を訪れた肥後の某藩士は琉球に強い関心を寄せ、城下の藩士との交流で得た琉球情報を詳細に書きとめ、琉球人とも数回会って琉球や中国の話聞き取っている(紀行文⑤)。また三線や「琉球図」を見、泡盛を飲むなど、琉球の物にも触れている。加えて「琉球店」・「唐物店」なる店にも出かけている。琉球店とは『鹿児島ぶり』に挿絵が載る下町の「山崎屋」のことであろうか(参考絵図(5)-(2))。店の暖簾には



【図4】『撰津名所図会』巻4大坂部・上(1798年刊)「伏見町唐高麗物屋(唐物屋) とうこまもの (国立国会図書館デジタルコレクションより)

「琉球物、現金売り、山崎店」と記され、店内には壺が描かれている。「唐物店」は不詳だが、各都市にあった唐物屋（舶来品の販売店）のようなものであろうか【図4】。

琉球経由で薩摩に入る唐物は、藩が召し上げる生糸・絹織物以外は、「藩内のみで取り扱い、他藩へ出すことは厳禁」とされていたが、「琉球店」や「唐物店」はこうした禁令とどのように整合するのか／しないのか、興味深いところである。なおこの肥後藩士がこれらの店で実際に買い物をしたかどうかは紀行文からは判断できないが、末尾に付された旅行中の買い物リストに「朱墨・粉朱・唐紙」といった唐物の名が見える（紀行文⑤）。いずれにせよ城下には琉球館・琉球船・琉球人だけでなく、琉球店や唐物店といった異国要素も存在していた可能性が高く、各要素の相乗効果により「異国情緒溢れる空間」が生み出されていたものと考えられる。

こうした自藩の異国性の「価値」は薩摩人もよく理解していた。藩政改革のための資金調達に協力した大坂の豪商高木善助は、1829年の薩摩訪問の際に藩から招かれ、城下鶴江崎（稲荷川河口付近）の重富島津氏の別邸で開催された「琉球人による踊りと卓袱（^{しっぽく}卓子）料理」の趣向による宴会に参加している〔渡辺美季 2015〕。卓袱料理とは中国やオランダの影響を受けて生み出された長崎の郷土料理だが、島津家ではしばしばそれが接待の献立に用いられた〔芳 1980〕。自らの異国性を補強するツールと

していたのであろう。

卓袱料理と琉球人の組み合わせは、藩外の者に異国性——すなわち薩摩藩の希少的価値——を感じさせる接待の演出として、藩のみならず城下の藩士にも用いられていたようである。先述した肥後の某藩士は、城下の知人藩士宅において卓袱料理の宴会でもてなされているが、数十人が参加したというその宴会には琉球人4名も招かれている（紀行文⑤）。

このように「藩外を意識した異国性」の演出が、ある程度の広がりをもって藩内で実践され、薩摩人の自意識の一角を支えつつ、その行動様式や生活文化の一部となっていく一方で、彼らの日常生活へより内在化した「藩外を（相対的に）意識しない異国性」もまた存在していた。例えば藩内各地の郷土芸能となっている琉球人踊（^{じきじんおどり}「唐人踊り」と呼ぶ地域もある）⁽²⁴⁾、琉球より輸入され薩摩の食文化として受容された塩豚や泡盛、琉球から多くもたらされたハレの膳の食器東道盆、⁽²⁵⁾藩内で広く用いられた「帰化朝鮮人の種裔」⁽²⁶⁾が造る苗代川の陶器などは、いづれも近世薩摩人の生活文化と一体化し、薩摩文化の固有性と結び付いた異国性であるといえよう。こうした「内在的な異国性」は本絵引では十分すくい取れなかったが、それらは百図の表現する「藩外を意識した異国性」とも繋がりつつ、近世薩摩の生活文化やアイデンティティーを形成しており、それらを総合的に分析・考察することが今後の課題といえるだろう。

【注】

- (1) 絵図選定の際には、伊作牧の馬追いを描いた「馬追ノ図（自御牧内馬追図）」（日置市吹上歴史民俗資料館蔵、1856年生まれ男性が、1869年に廃止された伊作の馬追いを1917年に回想して描いたものの草案本）や『倭文麻環』（1812年、白尾国柱著）所載の薩摩藩領の祭祀・踊りなどの由来譚の挿絵の絵引編纂も検討されたが、時間的制約や画像入手の困難さなど諸般の理由により叶わなかった。
- (2) ある地域の沿革・地理・風俗・人物・事件などを総合的に記録した書物で、いわばその地域の百科事典のような性質を持つ。
- (3) 中国や西欧の文化に強い関心を寄せ、中国語を学んで愛好し、文芸・文化の振興に力を注いだことで名高い大名である。
- (4) 京都の作家秋里籬島と大坂の画工竹原春朝齋による京都の案内書で、京都の書肆から刊行された。
- (5) なおそれより前の1795（寛政7）年に江戸で国学を学んでいた藩士の白尾国柱が『甕藩名勝考』と題した地誌を編み、藩主に献上している（新田宮など6点の挿絵がある）。国柱はその後1799年に江戸藩邸に召され、翌年記録方見習となり、1819年に記録奉行に任じられている〔横山 1987〕。
- (6) 我封内者旧邦而多名山奇景、於是命太史（大史）橋口今彦善古（兼古）、撰勝景百図、令画工写之以為五卷、

- 号曰薩藩勝景百図、又用和語編集図考五冊副之、今茲春二月重豪私献之大家。(旧記雑録追録卷 150、1415 号 [鹿児島県維新史料編さん所編 1977 : 455-456])
- (7) 百図・百図考の請求記号はそれぞれ「島津家文書-76-10」・「島津家文書-72-23」である。
 - (8) 法量は、第 1 巻 38.5×2602.1 cm、第 2 巻 38.5×2960.3 cm、第 3 巻 38.5×3637.4 cm、第 4 巻 38.5×2842.6 cm、第 5 巻 38.5×2722.9 cm である。
 - (9) 各景の画題は本書 I 「薩藩勝景百図の概要」に載せた一覧を参照されたい。なお [鹿児島県 2005] に全景の小画像が掲載されている。
 - (10) 精緻な百図の方が実態を正確に反映していることもあれば、逆に簡略な『薩藩名勝志』の方がより正確なこともある。なおこの点については橋口巨氏よりご教示をいただいた。
 - (11) 伊勢国の安濃津、筑前国の博多津、薩摩国の坊津を指す。
 - (12) 琉球館・琉球船は『薩藩名勝志』巻 1 の挿絵「浄光明寺眺望」・「(同) 其二」に小さく描かれている。
 - (13) 代表的な研究として [渡辺芳郎 2005] [久留島・須田・趙 2014] などがある。
 - (14) 荒野泰典は「16 世紀-17 世紀初の東アジア国際交易ブームの中で出現した日本の「諸民族雑居」状況は、幕府のいわゆる「鎖国」政策によって否定され、定住「外国人」は帰国か日本同化の択一を余儀なくされ、この流れの中で近世日本の「国民」が形成されていった」と指摘する [荒野 1987]。
 - (15) 1828-38 年に薩摩藩に通った大坂の豪商高木善助は「衣類は日本風なれど、年始の礼に城下へ出る節、または太守御通行の節、重役方往来の節は、必ず先祖伝来の朝鮮服を着し、マンキンとて、馬尾をさまざまに織て、形もいろいろ頭巾の如く立烏帽子の如くなるを、冠り出るなり」、「されども常服は、下の条本文に記する如く、日本と替わる事なく、只惣髪といふまでにて、手巾などにて頭をつつめば、田を耕し機を織る男女、日本人と替る事なし」と記している ([薩陽往返記事] [宮本ほか 1969])。
 - (16) ① [橋 1974]、②・⑥ [宮本ほか 1969]、③ [日本随筆大成編輯部編 1995]、④ [荻原ほか 1954]、⑤ 沖縄県公文書館岸秋正文庫蔵本 [小野ほか 2006]、⑦ [竹内ほか 1969]、⑧ [吉田 1975]。
 - (17) 旅の目的は不明だが、薩摩において作者が最も熱心に取り組んでいるのは、琉球情報の収集および唐物（多くは書画）を中心とした舶来品の鑑賞である。
 - (18) 琉球駐在経験のある藩士や琉球館の小吏を務める藩士にも数回会っている。
 - (19) 管見の限りでは、これ以外に薩摩藩内における唐物店（ないしは唐物屋）の存在を明記した史料は見当たらない。なお本史料における唐物店については [真栄平 2009] がすでに言及している。
 - (20) 1793 (寛政 5) 年に「琉球より薩州へ相渡候唐物之内、白糸・紗綾は、先年より御免之上、京都へ問屋定置相廻候、其外之品は国中迄取遣いたし候、他国へ出候儀、厳密禁止之事」との藩命が出ている [藩法研究会 1969 : 278]。なお代表的な琉球輸入唐物としては、藩内で広く出土する清朝陶磁が挙げられる [橋口 2009]。
 - (21) [渡辺美季 2015] では宴会の場所を「大隅重富の別荘」としたが、これは誤りであった。本稿によって訂正したい。
 - (22) この時は琉躍と唐躍が披露された。
 - (23) 宴会の座敷は「悉く唐風」に飾られたという。
 - (24) 多くは琉球風の仮装による軽快な踊りである。慶祝行事の時などに踊られる。また市来の大里集落の七夕踊では前踊の一部として「大名行列・琉球王行列・薙刀踊」からなる行列の出し物がある。近世日本では全国各地の祭礼で「唐人踊」や（行列の出し物としての）「唐人」仮装が行われ、その多くは朝鮮通信使のイメージに基づいて「創作」されていたが、その薩摩版といえるであろう。なお祭礼における唐人仮装についての主な研究として [トビ 2008] がある。
 - (25) 鹿児島県の小学校教師として鹿児島県の宮之城に 1889 年より 2 年半滞在した長岡出身の本富安四郎は、その『薩摩見聞記』に「泡盛は大なる甕に入れ周囲を縄にて隙間なく纏ひ、琉球より送り来る」、「琉球よりも絶えず塩漬の豚を送り来る」と記している [谷川 1971]。『薩摩風土記』にも「(琉球船が入港する) 夏の内は、琉球より塩漬の豚を下す。至てかうぶつ (好物) なり」とある [原田 1975]。
 - (26) 本来は中国の食器で、宴席などで料理を盛りつける蓋付きの盆。『薩摩風土記』に「とんだぶ (東道盆) 之事。とり肴やにとんだふのかん板 (看板) あり。琉球朱ぬりの台付、しきりいくつもあり。それに色々のとりさかなをならべ、酒の肴出す」とある [原田 1975]。
 - (27) 『薩藩名勝志』は「古へより朝鮮瓷器の製法を伝え平生の産業となし……種々の手業をなし多くの陶器を造る、故に里俗壺人又高麗人などゝいへり」と記す (巻 5)。ただし一七世紀後半から朝鮮系製陶技術の在地化が進展し、日本市場の需要に対応する形で 18 世紀後半頃に土瓶 (茶家) 生産が開始されるなど [渡辺芳郎 2014]、苗代川で造られる陶器そのものは必ずしも「朝鮮風」ではなかった。なお苗代川の土瓶は、藩に利潤をもたらす商品として藩外にも流通した [橋口 2001]。

【参考文献】

荒野泰典 1987 「日本型華夷秩序の形成」 朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史』1 (列島内

外の交通と国家) 岩波書店

- 萩原進・千々和実編 1954『高山彦九郎全集』4 高山彦九郎遺稿刊行会
小野まさ子・漢那敬子・田口恵・富田千夏 2006「史料紹介 岸秋正文庫「薩遊紀行」『史料編集室紀要』31
鹿児島県維新史料編さん所編 1977『鹿児島県史料』(旧記雑録追録7) 鹿児島県
鹿児島県・鹿児島県歴史資料センター黎明館編 2005『はるかなり 江戸・鹿児島の旅』(平成17年度 黎明館企画特別展) 同館
鹿児島大学附属図書館編 2000『江戸のまなざし 薩摩の名所図会展図録』(平成12年度鹿児島大学図書館貴重書公開) 同館
鹿児島大学附属図書館編 1997『鹿児島大学附属図書館蔵 玉里文庫等善本図録』(鹿児島大学中央図書館落成記念) 同館
河添房江 2014『唐物の文化史——舶来品からみた日本』岩波書店
芳即正 1980『島津重豪』吉川弘文館
倉地克直 2001『近世日本人は朝鮮をどうみていたか—「鎖国」のなかの「異人」たち—』角川選書
久留島浩・須田努・趙景達編 2014『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』岩波書店
渋沢敬三編著 1965-1968『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店
白井哲哉 2004『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版
高津孝 2010『博物学と書物の東アジア——薩摩・琉球と海域交流』榕樹書林
竹内利美・原田伴彦・平山敏治郎編 1969『日本庶民生活史料集成』9(風俗)
橋南谿(宗政五十緒校注) 1974『東西遊記』2 平凡社
谷川健一編 1971『日本庶民生活史料集成』12(世相) 三一書房
トビ、ロナルド 2008『「鎖国」という外交』(日本の歴史9) 小学館
永田雄次郎・山西健夫 1998『薩摩の絵師たち』(かごしま文庫43) 春苑堂出版
日本随筆大成編輯部編 1995『日本随筆大成』3(第三期) 吉川弘文館
橋口亘 2001「南西諸島にもたらされた近世薩摩焼—近世薩摩焼流通の南と北—」『鹿児島陶磁器研究会 からから』10
橋口亘 2009「近世薩摩における中国陶磁の流入—清朝磁器を中心に—」東アジア地域間交流研究会編『から船往来—日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』中国書店
原田伴彦編 1975『日本都市生活史料集成』3(城下町篇I) 文彩社
藩法研究会編 1969『藩法集』8(鹿児島藩・上) 創文社
福田アジオ 2007「生活絵引編纂の世界的意義」『神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告4/第二回国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
藤川玲満 2014『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』勉誠出版
真栄平房昭 2009「海を越えた扁額—『薩遊紀行』にみる琉球・中国の扁額—」『海が繋いだ薩摩—琉球』(輝津館企画展図録) 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
松井洋子 2010「ジェンダーから見る近世日本の対外関係」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『近世世界の成熟』(日本の対外関係6) 吉川弘文館
宮本常一・谷川健一・原口虎雄編 1969『日本庶民生活史料集成』2(探検・紀行・地誌 西国篇) 三一書房
横山學 1987「琉球認識の展開と琉球国使節」同『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館
吉田武三編 1975『松浦武四郎紀行集』(中) 富山房
渡辺美季 2014「『琉球交易港図屏風』考」『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究班編『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター
渡辺美季 2015「島津重豪と久米村人——琉球の「中国」」鈴木彰・林匡編『島津重豪と薩摩の学問・文化——近世後期博物大名の視野と実践』(アジア遊学190) 勉誠出版
渡辺芳郎 2005「なぜ薩摩藩は苗代川に朝鮮習俗を残したのか?」『鹿大史学』52
渡辺芳郎 2014「考古学資料から見た近世苗代川の窯業」久留島浩・須田努・趙景達編『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』岩波書店